琉球大学学術リポジトリ

自閉児の対人関係障害の改善法：米国における「社会物語り」の実践例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): Social story, directive, perspective, descreptive 作成者: 中村, 哲雄, Nakamura, Tetsuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5049

琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要
No.1, 41-52, 1999.

自閉児の対人関係障害の改善法

－米国における「社会物語り」の実践例－

中 村 哲 雄

On a Teaching Technique for Improving the Social／Communication Deficits in Individuals with Autism: An Introduction to the Socalled Social Story Book Which Is Developed to Help Their Social Skills in U. S. A.

Tetsuo NAKAMURA*

Summary

This is an explanatory paper on "The New Social Story Book" which is developed first by Carol Gray in U.S.A. The aim of this book is to respond to the qestions: Can we teach theory of mind and theory of people? Or how can we teach autistic children ?

This book is a teaching manual to help individuals with autism read and understand social situations. The social story is a story written according to specific guidelines to describe a situation in terms of relevent cues and common responses. This material has four basic types of sentences: directive, perspective, descriptive, and control. Implementation of these sentences are very important when to compile the social stories. I explain the book and how to use it in detail.

Key words : Social story, directive, perspective, descreptive

1．はじめに

英国の自閉症研究グループの一人であるSimon Baron-Cohenが、自閉症の幼児がごっこ遊びをしない、成長しては社会的文脈の理解ができない、他者の心を読み取れないという特徴について、その背景要因には「心の理論」の障害があると、その著「心盲」[1]（Mindblindness－日本語訳は「マインドブラインドネス」[2]）で主張してから数年が経過した。

「心の理論」という用語は、1987年にBaron-Cohenが指導を受けたA.Leslie[3]によって使用されてたものであるが、この理論の発表以来、米国では自閉児の行動特徴の一つである社会的障害の改善について、「新社会物語り」[4]（The New Social Story Book－具体的例文は本論文の5章以下に訳出）という著書が注目されている。

米国で注目されている「社会物語り」は、自閉児がもつ社会的対人関係の弱さや障害に注目して作成されている。従ってその作成背景にある自閉児の対人関係障害を先ずレビューすることとしたい。

2．自閉児の三徴候論

自閉症を徴候群としての障害と見る見方は、WingとGould[5]（1987）の研究によってより明確となってきた。これまでも米国のDSM-Ⅲ-R[6]で徴候としては、対人相互反応の質的障害、コミュニケーションの質的障害、行動・興味・活動等の限定的及び反復的な様式、と言う診断基準は呈示さ

*Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

れているが、ここでは二人の精力的な種々の障害の比較検討により特定された自閉症の基本的徴候の三つを以下に示した。

- 対人関係の障害
- コミュニケーションの障害
- 想像力の障害

Wingによると自閉児が示す多様な行動特徴は、これら三徴候が原因となっているためとなる。例えばジェスチャーを理解しない、反響言語を使う、流暢だが奇妙な話し方をする等の現象は、すべてコミュニケーションの障害に起因している。また車を使った見立て遊びよりも、車輪のみに関心を示してそれを回転させたり、あるいは数字や時刻表等に興味を示すのは、想像力障害が反映している。さらに人との交流を嫌い、自分の世界に閉じこもったり、独言をしたり、あるいは受動的であったりするのは、対人関係理解の欠如又は障害に因るとされる。

自閉症が示す行動特徴の説明原理は、脳の障害、言語障害、情緒的障害、母子形成不全等と、諸説が出されてきた。しかしこれらのいずれの学説も、Wingらの示す三徴候の発生原因について、未だ合理的な説明に成功したものはない。

筆者はWingらが提示したこの自閉症の三徴候論は、説得力があり信頼できるものとして考えている。しかもここに引用したWingらの説は、自閉児が示す行動特徴を社会的視点から考察しているHobson[7]やDowson[8]らの社会的情緒障害を支持する立場にあり、「社会的物語り」の作成の理論的な重要な情報を提供していると考える。

3．知能と対人関係

自閉児は対人関係に障害があることはKanner[9]の発見当初から言われてきたことである。自閉という言葉自体、精神医学的に「物や人への人格的接触の狭さ」を表す用語とされている。しかし対人関係の障害は、自閉児に限ったことではない。人は何らかの障害を持つと、例え小さなケガであっても、それによって情緒情動の発現に影響を受けるのが常である。まして慢性的な障害を心身に持つとなると、社会的対人的行動又はコミューニケイションに問題が生ずるのは当然のことである。

ところで、対人関係障害の心理学的要因として先ず考察されるのは、知能であろう。知能は生きる力又は生活する力と大きく関わっていると考えられるために、それは様々な能力と関係づけて研究されてきた。

知能研究の従来の最も中心的な研究は、知能と学力の関係であろう。今日では知能の信頼度も非障害児教育では、以前ほど重要視することがなくなったが、障害児の心理学や教育学では、未だに知能は重要な各種の判断基準となっている。

知能と対人関係障害の関係性を明らかにしたものとして、よく知られたものに先の英国のWingとGould[11]の論文がある。Wingらは「精神遅滞と社会的障害の間の関係で最も注目すべき特徴は、遅滞が重くなるほどに社会的に障害された子供の占める割合は大きくなる。つまり正の相関があること、そして知能水準が低くなるほどに、そこでの社会的障害は超然とした無関心（aloofness and indifference）の形をとりやすい、ということである」と述べて、知能と社会的関係の関連性を指摘している。図1[12]は、二人が発表した知能と対人関係障害の報告である。

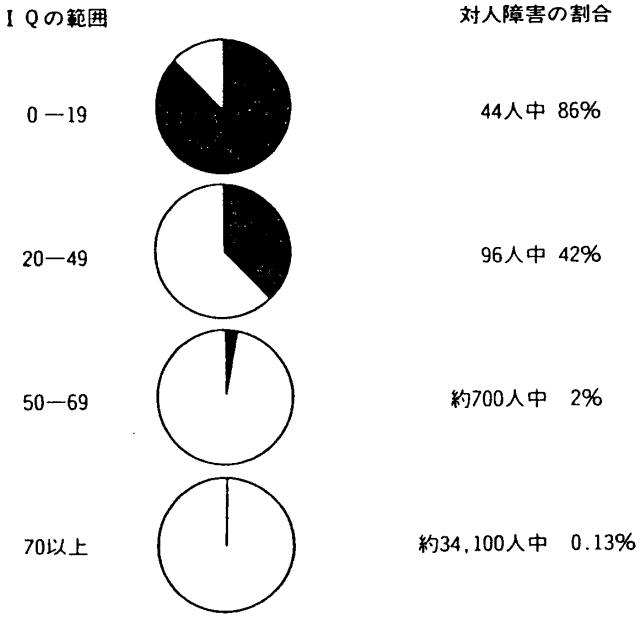

図１　15歳未満の子供の総人口約３万５千人における IQ段階別に見た、対人障害をもつ子供の割合
（ウィングとグールドの研究より）（日本語訳書より引用）

この図によると知能と対人の関係性は顕著に影響し合っていることが解る。特に知能の得点では50点を境にして、大きく悪い方へ変化している。また得点が20未満の重度の障害児の場合は、対人関係を認めるのが困難な状況にあることが示唆されている。

ところで自閉児の知能の障害の程度はどうだろうか。Smalleryらの研究（1988）[13] によると、自閉児の75％に知的障害（知能指数が70以下）があり、知能指数が低くなるに従って自閉症の発生率が高くなると指摘されている。この報告によると自閉症の四分の三は知的に障害が認められても、残りの四分の一には知的な障害がないことになるので、これらの自閉症が示す対人的社会的障害を、知的発達の視点のみで説明することは、未だ困難と言えよう。

4．自閉症と心の問題

自閉症の行動特徴を三徴候として呈示したWingらの説を、最もよく説明しているのがBaron-Cohenによる「心の理論」だとは、「mind-blindness］の日本語訳者達[14]の評価である。

Baron-Cohenの「心の理論」説によると、人は人として他者の行動や心を読み取るために四つのシステムすなわちIntentionality Detector（意図の検出器－ID）、Eye-Derection Detector（視線の検出器－EDD）、Shared-Attention Mechnism（注意共有の仕組み-SAM）、Theory-of-Mind Mechanism（心の理論の仕組み-TOMM）を発達させてきた。その関係を図[15]に示すと以下の通りとなる。

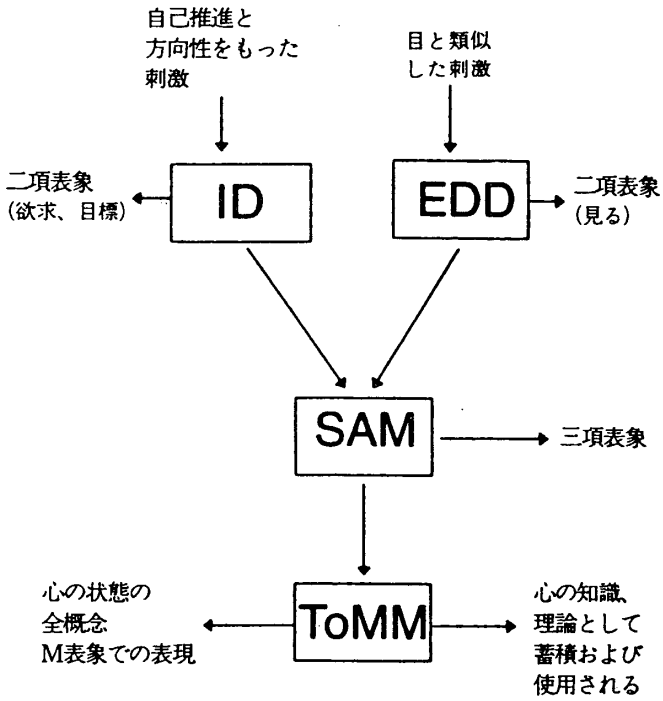

図２　心を読むことの発達－四つの段階
（日本語訳書より引用）

この図に示されたシステムでは、自閉症は心の読み取りに必要な基本的能力である意図の検出器及び視線の検出器のレベルには問題はないとされている。このレベルは、二項関係の表象に関係した読み取りであるので、自閉症はそれほど問題を感じないようである。
具体的な例を上げると

他者が　食べ物を　欲している
他者が　ドアを開けようと　している
他者が　自分を　見ている
他者が　ドアを　見ている

これらに示された事例は、第三者の行動を見てその意図を判断するID及びEDDレベルを表しているものだが、自閉症はここまでは問題はないという。問題なのは次に示された SAMつまり注意注目の共有の能力である。このレベルは他者と自分と対象の三項関係の表象能力を必要としている。前レベルが他者の行動の見る又は知る能力を要したのに対して、この三項関係は「他者と自分は同じものを見ているということを知る又は見る」という形の共感性が求められる。自閉症はこの点になると困難になるというのが、心の理論が示した重要な点であろう。

SAMのレベルで躓いた自閉症が、さらに上位機構であるTOMMの認知能力を獲得するのは容易でないことが予想される。このTOMMにおける心的状況は、自分の意図、知覚、認識を他者のそれらと関係づけて統合的に理解する能力である。具体的には次のようである。

ジョンは　信じる　「雨が降る」　と
メアリーは　考える「私のおはじきはバスケットの中に入っている」と

ここでは自己がもっている心的状況を他者にも同様の心的状況を見る、知る、又は感じるということが重要な能力となる。これは人と人との関係を理解する重要な能力であるので、これに障害が生ずることは、当然、対人関係に大きな問題となる。先に示したLeslieによると、このような能力は、普通幼児期に既に見られるという。

これまで検討してきたようにBaron-Cohenらの心の理論では、自閉症は人の心を読み取る能力、とりわけ他者と同調したり注視したり感じたりすることを感じたり読み取ったりする能力に困難を示すとなっている。社会的な交流を基本としている人間の生活を考えた場合、自閉症に対して私達はこの基本的能力の育成発達にどのような対処法又は指導法を構築したらいいのだろうか。それは容易ならざる問題であり課題であることだけは疑問の余地なしである。

5．社会物語り（Social Stories）とは何か

1） Carol Grayと社会物語りの誕生[16]

「社会物語り」というのは、アメリカはミシガン州のジエニソン（Jenison）在の高等学校の女性教師、キャロル・グレイ（Carol Gray）が1991年に初めて自閉症のための指導用テキストとして発表した教材のことをいう。

このテキストが「社会物語り」というタイトルを命名した理由は、Grayによると自閉症が生活や社会的交流をスムーズにするための具体的な情報やテクニックを、あるいは基本的な生活場面での望ましい行動基準または実行すべき行動等を示しているからだという。実際、テキストを見て見ると具体的な情報の選択、その作業過程を考えると、これは正に社会的な実践行動を物語り風に自閉症達に語りかけているとも感じられるので、そう呼ばれたと見ることもできよう。また別の見方をすると、これは社会的文脈を解り易く例示してあるということで、正に社会的な物語り（social stories）であるということである。

「社会物語り」は、文章や音声で予定又は予期的行動を呈示し、自閉症がそれらを読み取り、理解し、実行できるよう配慮し、計画されている。それゆえ対象としては、当初、能力が高い児童生徒を対象としていたが、現在では児童から大人までその適用範囲が拡大されてきている。

Grayがこのテキストを作成した動機は、体育館でのゲームの授業で自閉児が参加できないのを見て、彼等をどうすれば授業に参加させることが可能かを考えた結果、思いついたものだという。これが今アメリカの学校で、自閉症の対人関係の障害の指導法として評判となっている「社会物語り」という名のテキストの誕生背景である。Grayが最初に思いつき試みた方法は次のようなものであった。まずゲームの授業を行う前に、ゲームに関するルールやゲームの楽しみ方、参加の仕方等について詳しく書いた文章や絵等を生徒達に示し、それを何度も見せたり、朗読させたりして覚えさせた後に、ゲームへ誘導・参加をさせるという方法であった。その結果、思いの外自閉児らはゲームのルール等を理解して、他の生徒達とゲームができるようになったという。

それ以後、Grayはゲームだけでなく日常生活全般についてのノウハウを、仲間の教師や生徒達の協力とアイディア等を取り入れて、より充実したテキスト作りを目指して来た。

現在のところは、改訂版「The New Social Story Book」[17]を発表していて、これが全米的に好評を得ている。全米各地でその実践法の講習会等が開催されるまでに発展して来ている。

筆者は数年前、オレゴン州の自閉症の研究大会に参加した際にこのテキストを入手して以来、その方法に強い関心をもって来た。最近はインターネット上でも自閉症研究所や施設の情報紹介で、自閉症の指導法の一つの有力なものとして、この方法の研究動向と効用が、目立って増大して来ている。

インターネット情報[18]では、最近、Grayのこの優れた指導法に取り組み、成果を挙げたということで、カンタベリ・クリスト・チャーチ大学のCarol Rowe教授が表彰を受けたとで報じている。大学レベルでの研究が注目され来た証しであろう。

特にこの教材で注目すべきは、この「社会物語り」が前章で示した最近の自閉症の「心の理論」によって示されたように、自閉症が他者の心の動向を読み取れずに、対社会的交流の能力に困難を来しているという問題に対して、その解決法としてこれが有効な指導法となりうるという点にある。

教育現場では自閉症をどのような指導方法で指導したらよいのかという点で、戸惑っている実態があるので、これには大きな期待がもてるのではないだろうか。

そういうことで、この指導法は今後世界の注目を集めることになるものと思われる。それゆえGrayの「社会物語り」とは何かについて、日本でも早急にこの方法について理解を深め、実践して見ることは重要だと考ている。

2）The New Social Story Bookの内容構造とその特徴

このテキストには文章による内容作成の構造化に際し、つぎのような留意すべき四つの重要な文型[19]とその編成視点が示されている。その四つの視点とは以下の事項のことである。(1) 説明文 (descriptive sentence)、(2) 見通し文 (perspective sentence)、(3) 指示文 (directive sentence)、(4) 自制文 (control sentece) の四つである。

これらの四つの文型は、具体的に社会的交流場面や状況についてそれどれ特徴的な文体で構造化し、自閉児らがよりよい理解と行動がきるように配慮される必要がある。

説明文

この説明文の文型では、行動や状況について誰が、何処で、何を、何故、等々について具体的に記述する。

例文「人は考えが変わったと言うこともある。」
「学校のベルの音は、私達に休み時間の終わりを知らせています。私達は教室に入り、そして先生と本を読みます。」

見通し文

この見通し文の文型では、ある行動や状況について他者が示す行動や感情について具体的に示す。

例文「このことは、あの人達にはある一つの考えがあったが、今は別の考えにかわっていることを意味します。」
「始業のベルが鳴ると、生徒達が静かに並んで教室に入るようにすると、先生は大変うれしいです。」
「生徒達は先生から物語りを聞くのが楽しみです。先生は生徒が聞いてくれるのが好きです。静かに聞いてくれるともっと嬉しいです。」

指示文

この指示文の文型では、個人がとるべき望ましい行動や状況を具体的に述べる。この文型は説明文の後に示されて、自閉児が取るべき期待又は望まれる行動の形で記述される。従って「私は･･･したい (I can or I will～)」の形の文章表現される点に特徴ある。

例文「私は友達が考えを変えても、気持ちを落ち着かせて勉強をします。」
「私は休み時間には遊びます。始業のベルは私には教室に入るための合図です。私は遊びを止めて列に並びます。他の生徒達と一緒に静かに教室に入ります。教室に入ると席につき、先生と勉強を始めます。」

自制文

この自制文の文型では、自閉症自身が「社会物語り」のテキストにおける情報文を想起して、それを生かせるようにするための方略が述べられる。従って、作者のGrayによると、これらの文型は自閉児自体によって記述されている点が他と異なっていて、初版本にはなかったのを改訂版から導入したという。

例文「私はベルの音が休み時間の終わりの合図であることを、湯沸 かし器 (teapot) を考えて理解します。湯沸かし器が鳴り出すとお湯が沸いたことを知ります。ベルは湯沸かし器の鳴る音である。だから湯沸かし器が鳴ったら休み時間の終わりである。」
「友達が『私は考えが変った』と言う時、私は彼が何かを紙に書き、それを引っ掻き、そしてまた新しいもの書いたこを考えます。」

「社会物語り」には、このらの四つの文型構造を適切に編成することによって、自閉症の対人的

交流の支援がスムースに行えるよう配慮されている。これらの支援のために「社会物語り」の制作には、通常、教師等の専門家が主体となって当たるが、親や生徒達との協同制作も行われている。

自閉症が示す対人的交流の構造化は、できるだけ日常的場面での交流を想定し、それによって実際場面での行動がうまく行くようにすることが重要となる。生活場面を想定した文型による事前の行動訓練が、実際の場面で生かされず、行動のズレや意識のギャップが起るうようでは問題である。それゆえテキスト作成に当たっては、日頃から障害児や非障害児達の行動の観察と記録をして、最も適切な社会物語を創作することが最大の留意事項と言えよう。

ところで「社会物語り」のテキスト全体の文型構造化では、先に示した四つの文構成がどのような配分で構成されたらよいのかという問題が、その作成過程で疑問として呈示されることが予想される。制作者のGrayは、次のように一つの物語りでの比率関係を明示している。

一つの物語り	
指示文	1
説明文	3～5
見通し文	
自制文	

Grayが示した一つの物語りを作成するには、指示文よりも説明文、見通し文、自制文が多く必要としていることになる。中でも特に説明文と見通し文が重要であるとされている。

これまでのGrayらの経験と実践によると、指示文が多くて説明文と見通し文が少なく、しかも具体性に欠けるのが悪い「社会物語り」の見本だという。それは何故かというと、より多くの説明文と見通し文と少ない指示文で構成されていればいるほど、より多くの新しい文脈や場面における自己の判断を必要とする訓練となるからだという。しかし注意すべきことは、説明文に対しては自閉症の中には理解するのに困難を示す者もいるので、その際は指示文が一緒に呈示されるのがいい。この物語が成功するための大事なことは、自閉児の日常生活と具体的に関わった物語りを常に意識して作成するということである。

3）「社会物語り」作成時のガイドライン

自閉症のための行動の指針又や基準となる「社会物語り」は、どのような基本的な作成指針をもって作成しなければならないのかを以下で述べたい。

「社会物語り」は自閉症の個別ニーズに合わせて作成されなければならないが、その際の作成原理は次のとおりである。

(1) 自閉児にとって困難と思われる状況をよく観察すること。
(2) 自閉児が誤解しがちな社会的疑問に答えるものであること。
(3) 自閉児の社会的能力（social skills）の評価及び教育課程上の誤解に対して答えるものであること。

個別ニーズに基づいた社会物語りを作成するには、具体的に次のことを配慮事項としなければならない。

(1) 状況説明は、適切な社会的手掛かり（social cues）と正しい行動が思いやりのあるの視点で記述されていること。
(2) どのような社会的能力訓練においても、その個別化が強調されること。
(3) 到達目標は、生徒が作成する場合も、解りやすいステップとして示されること。
(4) テレビの映像や映画で、現実のものと非現実のものかの区別ができるよう説明がされてあること。
(5) 日常的な反復行動（routines）と反復的行動でも変わる場合があることや、あるいはそれを無視すること（forgetting）も指導すること。
(6) 学習指導は、学習内容が実際の場で活かされるよう具体的実際的に指導すること。
(7) 感情の記載では、攻撃、恐怖、拘り、衝動などの多様な情動行動についても配慮がされていること。

よい社会物語りのよいかどうかの評価判断

は、以下の事項が活かされているかどうかによって決まってくる。

(1) 自閉児の能力の実態に合致した語句や文字を使っているか。
(2) 物語りの文型は、状況や事態を一人称の現在形で記述されていて、しかもそれが生徒自身が報告しているかのような文章となっているか。
(3) 出来事を未来形の文章で記述する際は、それによって不安を感じさせないようにすることが望ましいが、その際、例えば親しみのあるもの、場、活動等によって記載されているか。
(4) 使用する紙の質、紙の色、イラスト、写真、筆記用具等によっては混乱が起こることもあるので、それらに細心の配慮をしているか。(例えばイラストは効果的でないが、写真やマジック等は良い。)
(5) 社会物語りは、1ページに一つの物語りと一つの文章で構成されているか。必要な場合でも複数のステップ文になっているか。この方針は学習指導や活動場面の情報でも採られているか。
(6) 言葉の使用であいまいなもの、例えば、いつも(always)、ふつう(usually)、ときどき(sometimes)等を避けているか。
(7) 指示的文を良い行動が定着するよう積極的に使っているか。

以上は「社会物語り」を造る際の重要な留意事項であり、かつ指針である。しかし物語の内容は、出来るだけ多種多様なものを対象としているのが望ましいことは言うまでもない。

なお、社会的な状況を捉える際に重要なのは、次の二つの観点を忘れないようGrayは述べている。それは作成者自身の目で観ることも重要だが、自閉児自身の目で状況を観るということがより大事であるということである。つまり自閉児の視点・観点が「物語り」を決定する重要な要件となるのである。具体的には生徒達の状況に対する観方、感じ方、考え方、あるいは求めているもの、必要としているものは何か、等々についてよく吟味・検討することが良い「物語り」造りに要件となるのであ。

4)変化のある「社会物語り」

「社会物語り」には、変化をつけるために幾つかの配慮がされている。単純な物語りだけのテキストにならないためにも、また有効なものにするためにも、これらの配慮は大事なものと思われる。以下はその配慮事項である。

「社会物語り」チェックリスト

このチェックリスト物語は、ある特定の行動への対応を集中的に獲得させるためにステップを細かくしてして与えて、その獲得具合によってステップのチェックをしたり、あるいは一部のステップや物語を除いて行くことができるようにしたものである。

また自閉児達の行動の獲得次第によっては、行動ステップを減らして、それが定着しているかをチェックすることも可能のようにするようにするためのものでもある。ステップが減ったりあるいは除去されても、それを児童生徒自身が満たしたり、あるいは追加要求もできるようにすることも可能にしている。要するにここでは実際の生活場面での一連の行動が応用可能となっているかどうを見るのである。

カリキュラム物語り

自閉症は学習した教科内容の実生活面での活用・適用に難点がある。それで教科学習の流れを変える事なく、必要に応じて学習内容の物語り化を図るのが「カリキュラム物語り」である。文章や写真や絵などの教材と活用した物語りを用いいて、学習の臨場感・現実感を高めて行くことによって理解を容易にし、その適応能力も促進するようにするというのが、ここでのねらいである。

生成的社会物語り

これは社会物語りを生み出して行くための方法をいう。現実の多種多様な場面にマッチした「社会物語り」を作成するには大変なエネルギーと他の協力が必要となる。そこで随時随所で気づいたことを常時メモができるようにして、多様な物語

りを構成出来るようにすることが大事である。内容の多様化は、ちょっとしたメモや観察事項を記録があれば、それをベテランが物語りにうまく仕上げていく協力態勢が図られるようにするのが大事である。そうすれば物語りは生成的に生み出されて行くものとなる。

目標設定物語り

これは物語りでもって目標行動を設定し、それによってやる気を起こさせるというものである。そのためには作成した「物語り」の中には、指示文を意図的に除くようにしておいて、そこだけは生徒自身に「私は･･･したい。」という形の指示文を書かせるというものである。つまり事前に宣叙文による約束をさせて、自己暗示をかけ、その結果達成動機と行動を強めるというものである。

判断物語り

これは文字と通り、児童生徒が自分の行動のよりよい判断ができるようにするために、視覚的又は実際的な手掛かりを与えるものである。例えば音楽の時間に大きな声で歌っている児童生徒の場合は次のような判断物語りを提示するのであ。

「歌声は（volume）は人が歌う時の一つの言葉である。正しい歌声は隣にいる友達に聞こえる程度がいい。私は一人（solo）が歌う時を言うことができる。ソロの人（solo）は一人で歌います。ソロで歌うときはマイクを持って歌います。」

攻撃・恐怖・脅迫観念等の回避物語り

この物語では、児童生徒への強い調子の説明文による呈示が必要である。粗暴や強い感情の異常の生起要因をよく観察して、その解決と防止と回避について強く述べた形の物語りにすることが大事である。必要に応じて個別の指導物語りを作成することも重要な対策となる。

メディア物語り

多種多様な漫画、映像、物語り等は混乱の基になるので、その対応を具体的に物語りにして呈示することが重要である。

質疑応答物語り

これは「社会物語り」の理解と実践を確かめるために、いろいろな質問の物語りを作成することである。

5）「新社会物語り」とは

(1)　テキストの目次と内容

Grayの編纂による評判のこのテキストは、Grayが所属している高校の1993年度の心理学及び社会学の授業を受講した生徒達によって作成された文章が基となっている。約250名の生徒達が社会的に重要と思われる対人的マナー、常識、生活・交流場面等を、彼等の目と感性を通して捉えて、分かりやすく文章化したものである。従ってテキストの発行元はジェニソン公立学校となっている。

テキストの目次と下部の「物語り」のは次の通りである。

第1章　社会的技能（Social Skills）

1　チュウインガム、2　贈り物、3　幸せとはいい気持ち、4　人助け、5　抱擁の仕方、6　挨拶の仕方、7　人を幸せにする仕方、8　電話の掛け方、9　遊び方、10　学校でお菓子を貰う時、11　分け前、12　玩具での遊び方、13　微笑み、14　言葉のない挨拶の仕方、15　有り難うを言う時は、16　すみませんを言う時は、17　話す時の視線

第2章　人とペット（People and Pets）

18　赤ちゃんの抱き方、19　猫を飼う、20　犬と遊ぶ

第3章　身だしなみ（Personal Care）

21　悪い夢、22　シャワー室の使い方、23　シャワーの取り方、24　髭の剃り方、25　手の洗い方、26　手を洗う分け、27　服を切る分け、28　靴の履き方、29　新しいシャツ、30　風邪を引いた時、31　体温計

第4章　料理と食事（Cooking and Mealtime Routines）

32　ケーキの作り方、33　食卓での食事、34　スパゲッティの食べ方、35　ディナーの時の

マナー、36 配膳の仕方、37 食事の時に噛む音を出ない、38 食事の時の祈り、39 新しい食べ物、40 健康的な食事

第5章 家の手伝い（Helping Around the House）
41 部屋の掃除、42 寝具の片付け、43 スイッチの切り、44 明かりを消す、45 電動掃除器、46 手紙が来たとき

第6章 家の外での遊び（Outdoor Games and Activities）
47 花を摘み取る時、48 休みの取り方、49 なぜ外で遊ぶの

第7章 学校生活（All About School）
50 朝の準備、51 安全な通学、52 通学バスの乗り方、53 補充の先生への接し方、54 先生の話の聞き方、55 先生が話しているときの態度、56 話す順番を待つ、57 授業中静かにする、58 先生へのお願い、59 何時質問をするのか、60 もう一度お願いの言い方、61 休み時間の過ごし方、62 生徒会の時、63 火災報知機が鳴ったら、64 避難訓練の時は、65 校内放送の聞き方、66 宿題がある分け

第8章 乗り物（Getting Around）
67 エスカレータの乗り方、68 車の乗り方、69、車で遠乗りする時、70 シートベルトの付け方、71 シートベルトを着ける分け

第9章 地域施設の利用（Community Helpers）
72 洗車場、73 教会、74 祈り、75 図書館、76 散髪

第10章 レストラン及び買い物（Restaurants and Shopping）
77 食事の体験、78 テーブルでの待ち方、79 外での食事、80 食事中の話し方、81 手で掴んで食べてよい場合、82 レストランでの食事の仕方、83 ショッピング仕方、84 新しい靴の買い方

第11章 天気予報の見方（Understanding the Weather）
85 あられ、86 雨の日、87 雪ダルマ造り、88 雷、89 雨が降ったら、90 稲光が光ったら、91 雷は心配ない

第12章 余暇休日の過ごし方（Holiday, Vaction and Recreat ion）、92 バレンタインデー、93 国歌を唄う、94 独立記念の花火、95 泳ぎに行く、96 休暇、97 動物園に行く、99 演劇を見に行く、100 スポーツ見学に行く

第13章 社会物語りの解説（The Social Story Kit）

6） 各章の「物語り」の実例

この「新社会物語り」は、前章で内容の紹介をした通り、100項目の物語りで構成されていて、児童生徒達の生活全般をカバーする形のものとなっている。出来たら全部のものを訳出して紹介したいが、内容が膨大のためここでは、各章から比較的短い「物語り」を取り上げて訳出し、紹介したい。

第1章: 1－チューインガム（Chewing Gum）
「時々私はガムを噛みます。」」
「私は噛むときは一度に一つだけ噛みます。」
「私はガムを包み紙から取り出し、それから口に入れます。」
「私は口を閉じてガムを噛みます。」
「私はガムを噛んでいる間は、口から出しません。」
「私はガムの甘みが無くなったら、口から取り出し、チリ籠に捨てます。」
「また、私はチリ籠に捨てる時、小さな紙切れにガムを包んで、捨てることもします。」

第2章: 18－赤ちゃんの抱き方（Can I hold the baby?）
「私達は皆、赤ちゃんが大好きです。赤ちゃんを抱く時は気を付けて抱きます。」
「私は赤ちゃんを抱きたい時、大人の許しを得ます。」
「私は赤ちゃんを抱いている間、座っています。」
「私は静かに座り、ゆっくり動かします。」
「私は赤ちゃんを抱いて疲れたら、大人に合図を

します。」
「私は赤ちゃんを大人に渡した後で、離れます。」
「私は赤ちゃんを抱かせてくれて有り難うと、大人に言います。」

第3章: 25－手の洗い方（Washing My hands）
「手はよく汚れます。私は手が汚れたら、手を洗います。」
「私は手洗い場に行きます。」
「私は水道の栓をひねって水を出します。」
「私は手に水が掛かるようにします。」
「私は手に石鹸を着けます。」
「私は両手を擦ります。」
「私は水道で手をすすぎます。」
「私は水道の栓を閉めます。」
「私はタオル手を拭きます。」

第4章: 33－食卓での食事（Eating at the Table）
「私は食事の時間になると、席に着きます。」
「私はいつも腹がすいた時、食べます。」
「食事している間は席から離れません。」
「お母さんは、私が席に着いて食事をすることを喜びます。」

第5章: 42－寝具の片付け（Making My Bed）
「私は朝、目が覚めるとベッドから起きます。」
「私はベッドのシーツを伸ばし広げます。」
「私は毛布も伸ばし広げます。」
「私は枕を枕元に置きます。」
「これで寝具の片付けは終わりです。」

第6章: 47－花を摘み取る時（May I pick the flowers?）
「花にはいろいろな形、大きさ、カラーのものがありんす。」
「花には匂いがあります。」
「花にはいい匂いのものがあります。」
「花を摘み取るときは、先ず大人の許可を得ます。」
「私は花を摘むのは大好きです。」

第7章: 57－授業中静かにする（Staying Calm in Class）
「どの授業も楽しいです。」
「私は授業中静かに聞いたら、多くのことが学べます。」
「私は学べば学ぶ程、いろいろなことが出来るようになります。」
「私が静かに聞いたら、先生は喜び、新しいことを教えてくれます。」「新しいことを学ぶことは、大変楽しいことです。」
「静かに聞いていると、先生の話がよく分かるようになりんす。」

第8章: 70－シートベルトを着ける分け（Wearing Seat Belts）
「私は車に乗るときは、シートベルトを着けます。シートベルトは私を守ります。」
「シートベルトを着けると、締め付けられて不自由だが、安全です。」
「私は車に乗る度にベルトと金具をとり、ホールダーに入れます。入れたときのカチッという音を聞いたら、金具が掛かって、安全となります。」
「ベルトが締めっていると安全です。だから私はシートベルトを締めます。」

第9章: 76－理髪（Why do I get my hair cut?）
「髪はどんどん伸びます。」
「髪はときどき散髪をしなけばなりません。」
「理髪店の理容師は理髪の専門家です。理容師に理髪をさせてもケガをする心配はないです。」
「私は理髪しても安全であると信じます。」

第10章: 84－新しい靴の買い方（Getting New Shoes）
「私は足を温め保護するために靴を履きます。」
「靴は長く履くと破れます。そうなると新しい靴が必要です。」
「靴の店では男か女の人が、私の足に合った靴を見つけてくれます。」
「靴の店では、私は静かに履き試しをします。」
「新しい靴を履くのは嬉しいことです。」

第11章: 88－雷（Thunderstorms）
「雷は大きな音を出します。」
「雷の音はすごくうるさいです。時には耳をつんざく感じです。」
「私は雷を見ようとしません。家の中にいます。」
「雷は長く続くことはないです。嵐が去ると音も治まります。」

第12章: 97－動物園に行く（Going To The Zoo）
「動物園に行くのは、楽しみです。」
「私は動物園でいろいろな動物を見ることが出来ます。」
「私の安全のために動物は檻に入れられています。」
「私は檻の中に手を入れることはしません。」
「動物園は動物について勉強するのに楽しい所です。」

以上が各章毎に短い「物語り」を一つだけ選んで訳出したものである。これらの文章を読むと、自閉症の児童生徒達が、この文章によって自己の行動の取り方を具体的に知るようになるのが、この指導法の狙うものと言える。短い物語りだけなので、これだけでは十分ではないが、ある程度、Grayらが開発した「社会物語り」がどういうもんなのかに関する手掛かりは又は情報は掴めたものと考えている。

7） 指導の仕方

先に示した「物語り」は、その指導においては次のことを留意することが重要となる。

(1) テキストに記載されたいわゆる「社会物語り」は、児童生徒達の障害の実態に合わせて改編する。
(2) 対象児童生徒が高機能の場合は、「物語り」を何度も繰り返し提示し、理解の促通を図る。
(3) 対象児童生徒が言語的能力に劣る場合は、テキストをカセットテープ等に録音して、それを学校や家で聴かせるようにする。
(4) ステップ化した文章は、それぞれ一枚のカードに書き写して、携帯可能にし、随時反復予習と復習ができるよう工夫する。
(5) 個人によっては、文章スタイルや書体自体を工夫し、児童生徒達の個性を活かすようにする。
(6) 図や絵や写真等を活用して、興味関心を高め、文章の概念理解が促進するよう工夫する。
(7) カラーペンやマジック等の使用にも気を配り、児童生徒の好む用具を活用する。
(8) 文章は出来るだけ簡潔かつ適切なものにし、曖昧な表現をさけるようにする。
(9) 物語りは般化性が高く、実効性があるものとなるようにする。
(10) 児童生徒に提示する際は、導入として教師の朗読に合わせて児童生徒も後を追って読ませるようにする。
(11) 児童生徒をよく観察して、どこに問題があるのかについて常時記録し、改定ができるようにする。
(12) 作成した「物語り」は、大きく書き出し、壁に貼って児童生徒達が関心を持つようにする。
(13) 概念化が出来た児童生徒には、ステップを一部省略したりするようにする。
(14) 教師と児童生徒の信頼関係は、この指導法の成功の鍵である。
(15) 社会物語りは、担当者だけ出なく親や生徒や教師仲間の協力を得て、優れてものを造るようにする。

6．終わりに

「自閉症児の学習指導法」の著者、クイル博士[20]は学習の原理を次のように纏め提案している。

1）教材の構造化、2）指示の明確性、3）支援の系統性、4）活動の予測性、5）対話的記述文の提示、6）活動を示した構文提示、7）現実的活動に結び付いて構文提示、8）高度の反復練習、9）児童の理解レベルに合った構文提示、10）刺激的な言葉と視聴覚的指示、11）ポーズ（pause）の取り方、12）誇張の仕方

これらの学習原理は、Grayらが開発した「社会物語り」に全て当てはまる。この教材は、新しい理論を研究して、自閉症の最も特徴的な社会性の問題の解決に取り組んで来ているので、自閉症の学習原理に適切に対応していることが分かる。特に「物語り」の構成が自閉児の活動の見通しや、一人称による対話的記述にる現実感若しくは臨場

感が得られるようにしているが良い。物語りの記述は、随所に自閉症本人の参加意欲や、参加動機をたかめるための工夫もされている。例えば97－物語りでは、安全面の表記が皆の為という表記ではなく、敢えて「私のために」としている点に、その配慮が見られる。 今後、Baron-Cohenらの「心の問題」の指導法としても、この方式による指導が注目されて、大きな成果をあげる日が近いことを期待したいものである。

引用及び参考文献

1）Baron-Cohen, S., MINDBLINDNESS, AN ESSAY ON AUTISM AND THEORY OF MIND, A Bradford Book, The MIT Press, Second Printing, 1995

2）バロンーコーエン著、長野敬、長畑正道、今野義孝訳、自閉症とマインドブラインドネス、青土社、1997

3）Leslie, A., Pretence and representation: The origin of "theory of mind", Psychological Review 94: pp. 412-426, 1987

4）Jenison Public Schools, Carol Gray, Editor, The New SocialStory Book, Future Horisons, 1994

5）Wing, L.,and Gould,J., Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: epidmiology and classification, Journal of Autism and developmental dis-orders,9, pp. 11-29, 1979

6）American Psychiatric Association, DSM-Ⅲ-R Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Third Edition-Revised, pp. 38-39, 1987

7）Dawson, G. and Lewy, A., Arousal, attention, and the socio-emotional impairments of individuals with autism.,In Dauson, G. (Ed.), Autism: Nature, Diagnosis and Treatment, pp.144-173,1989b

8）Hobson,R. P., The autistic child's appraisal of expres-sions of emotion, Journal of Child Psychology and Psychiatry,27, pp.321-342, 1986a

9）山中康裕編集、現代のエスプリ、自閉症、NO.120,7, レオ・カナー著、牧田清志訳、情緒的接触の自閉的障害、pp.22-46, 1977

10）上掲書、平井信義、アスペルガーの「自閉的精神病質」について、p.47, 1977

11）Wing and Gould, pp.11-29

12）ウタ・フリス著、冨田真紀、清水康夫訳、自閉症の謎を解き明か

13）上掲書、p.49

14）バロン・コーエン著、長野敬他訳書、p.255

15）上掲書、pp.65-110

16）Jenison Public Schools,ibid

17）ibid

18）Internet, Asperger Syndrom: Social Stories Research Semi-nars, Autism Resource, May 13, 1999

19）Internet, Social Stories, written by S. M. Edelson, Ph.D.,Center for the Study of Autism, Salem, Oregon, May 13, 1999

20）Internet,1993 International Conference on Autism, Methodsto enhance learning, conference notes by Lisa Ruble, May 13, 1999